

子ども、保護者も不安を抱え、不安解消の方法を模索している。

第1章では、進路に関わる親子のコミュニケーションや、親子双方の考え方の違いについて、データで見えてきました。そこから見えてきた子どもの将来に対する保護者たちの思いとはどんなものなのでしょう。

構成・文／長島佳子

子どもが心配だからこそ 関わりたいと願っている

ここまでの調査結果をまとめてみると、以下のことが見えてくる。

① 親子のコミュニケーションは、深いテーマになるほど親子の感じ方のギャップが大きい。子どもにとって耳の痛い話はよく届き、保護者が心配してかけた言葉は届いていない。

② 父親は、日常のコミュニケーションは十分ではないが、進路選択に関わりたいたいという思いはある。現状では子どもにとっての一番の相談相手は母親。

③ 子どもの多くは進路に不安を持っている。これからの社会に対して保護者は非常に不安視しているが、子どもたちは比較的楽観視している。

④ 進学校ほど保護者が過干渉になっている。保護者の干渉ニーズは高まる傾向にある。

①のコミュニケーションギャップは、いつの時代にもある「親の心子知らず」

の傾向かもしれない。しかし②から④は、子どもの将来が心配でたまらず、なんとかしたいという今どきの保護者の姿が見えてくる。

保護者も未経験の未来社会に わが子を送り出す不安

89ページで解説したように、今どきの保護者たちは競争にもまれながら、社会に出るまでは「世の中は成長していくものだ」と信じて過ごしてきた。保護者の親世代が通ってきたように、自分たちも就職した会社で定年まで働けると思っていたはずだ。それが社会に出た途端に景気が停滞、終身雇用は崩壊し、はしごを外されたように感じ、その中で生きていく道を今も模索している世代だ。

技術革新と産業構造の変化で、10年後には今ある職業の半分はなくなると言われる時代。この先ますます不透明になっていく社会が、わが子が立ち向かっていかなければならない場

所だと保護者は知っている。しかし、そこで子どもや保護者がどう行動すべきかの正解がないことに不安を抱えているのではないだろうか。保護者は社会を知っている、学校で行われていることは知らない。学校や進学システムが保護者の時代と今とでは「違うらしい」となんとなくわかつてはいても、具体的な違いは理解できていない。子どもが日々どんな環境で学び、進路を考えているのかわからないことにも不安を感じているのかもしれない。

次章では、そんな不安を抱えた保護者たちが、子どもや学校にどんな期待をしているかについて見ていきたい。

